



[随想] Wedgwood の バックスタンプ

寺 井 良 平

Wedgwood の製品をショップのショーウィンドウなどで見ていると、その洗練されたデザインに、つい見られることがあるが、値札を見て二度びっくりすることが多い。とにかく高い。しかし、近頃はスーパーにまで Wedgwood 展示コーナーが現れ、品のよい磁器が手ごろな値段で並んでいるのを見ると、大分大衆化したものだと思う。

Wedgwood の製品を裏返してみると、タイトルの横のカットに示したように、W の大きな字の下に「小さな壺の絵」柄の取り込まれたバックスタンプを見ることができる。少し古い製品になると、W の字に抱かれた壺ではなく、単に壺だけが描かれている。ショップの店員に聞くと、20 年ほど前まではこの壺だけのデザインだったらしい。物によっては古い在庫があるらしく、壺だけの図柄も時々見つかるという。

バックスタンプに描かれたこの壺は、創業者 Josiah Wedgwood が一万回以上の試作を重ねて開発した Jasper (碧玉を模して作られた磁器) によって模写された「Portland の壺」である。

この夏、イギリスのストーク・オン・トレントにある Wedgwood 本社のヴィジター・センターを訪れる機会があった。工場の建物は周辺の森の高さに合わせたのか、せいぜい3階止まりで、遠くから見れば工場全体がスッパリ森に隠れてしまって見えない。いつもゴミゴミした街中の工場を見つけている身には、この森の中の工場には脱帽だった。しかし田舎過ぎて、観光客にはいささか不便なのかヴィジター・センターにはレストランも付属していた。料理は、もちろん揃いの素晴らしい Wedgwood 製の皿やボールにのって出てくるが、皿の上のロースト・ビーフやジャガ芋は、正直いってもう一つであった。

その本社入口に Josiah Wedgwood の銅像が立っている。ストーク・オン・トレントの駅前にも同じ銅像が

高い台座の上に載っているが、ヴィジター・センターの前の Josiah は、通行人とほぼ同じレベルに立っていて、ここを訪れる人々の記念写真のよい標的となっている。そして彼はその左手に壺を持っている。これが問題の「Portland の壺」だ。

この壺のモデルとなったオリジナルは、大英博物館にあるローマ時代のガラスの壺である。2000 年前の作品とは思われない素晴らしいガラス製品である。濃いブルーの下地に白いレリーフでギリシャ神話の話が描かれているカメオ風の逸品である。極めて迫力のあるノブールな作品で、底は平らに補修されているが、もともとは円錐形の底をもつ、いわゆるアンフォォーラ型の壺であつたらしい。それが何時しか失われ、平らに補修されたという。インターネットで大英博物館を呼び出すと、簡単にこの壺を見ることができる。Other Views のボタンをクリックすれば、絵は逆転して裏側の図柄まで画面に出てくる。もちろん拡大して見ることも可能だ。

大英博物館の展示品をよく見れば分かることだが、このガラスの壺はヒビだらけで、かなり入念に補修されていることが見て取れる。ある若者によって、展示中に粉微塵に壊されたことがあるからだ。150 年以上も前のことで、パンダリズム(文化破壊主義)か、精神異常か、その破壊の真相は分からないが、修復には大変苦勞をしたらしい。補修に際して、どうしても入りきらない破片が何十個も残ったという話である。この難しい修復に一役買ったのが Wedgwood のコピー作品だったといわれる。

このガラスの壺は紀元前 20—30 年頃のローマ時代の作だと推定されている。先ずブルーのガラス生地で下地を作り、その上に白生地を巻取り、宙吹きして壺に成形する。冷めてから被せた白ガラスの層を宝石カットの技法で彫り込む。この壺は 18 世紀頃、イタリアから英国に渡り、Portland 公爵夫人によって、破格

の値段で買い取られたらしい。昔から多くのガラス職人がこの模作に挑戦しているが、成功話を余り聞かない。Josiah Wedgwood は勧められてこの壺の再現を、彼の得意とする Jasper によって試みたが、陶磁器でガラスの質感を出すのに大分苦労したといわれる。Jasper というのは、前述のように、宝石ジャスパー（碧玉）に似せて作った Wedgwood 初期の濃紺の磁器の総称である。

Wedgwood 本社付属の美術館に行けば、この Jasper で作られた「Portland の壺」の実物も見ることができるらしいが、私の訪れた時はちょうど美術館の改装の最中で、残念ながら見ることはできなかった。その代わりに憧れのコーヒーカップと Jasper の「Portland の壺」のハガキを買った。それが最後に示した写真である。

コーヒーカップは日本での売値の半分であると煽てられ、2 対で 98 ポンドはたいだが、果たしてお買得だったかどうかは未だに分からない。帰国してから方々の Wedgwood の展示場を覗いたけれど、まだ同一模様のカップには出会わない。陶磁器の値段は、わが国でも、荒縄で括られた道端の投売り品から、「お宝鑑定大会」でアツく驚く高値の品まで、その上下の幅が甚だしい。よい品を買ったと思ひ込むことが大切なのかも分からない。



図 1 Portland のガラス壺（大英博物館）を模して作られた Wedgwood の Jasper 製の壺

それにしても、Wedgwood 磁器のバックスタンプに「ガラス」をモデルとした図柄が選ばれているのが面白い。

（寺井ガラス技術事務所）
E-mail: rterai@nifty.com